東京三高会だより
第29号
平成24年6月1日発行

三本野ヶ原

東京三高会
青森県立
三本木高等学校
同窓会東京支部

発行責任者　佐々木文雄／事務局　〒335-0001 埼玉県蕨市北町 4-1-5-503　高谷隆二方　Tel&Fax 048-442-5118 ／編集責任者　瀬戸口玲子

東京三高会の皆さん、お元気ですか？　変らないふるさとがそこにある。その当り前さは、かけがえのないものだったのですね。
長年親しんだ十和田観光電鉄の廃線。思い出が一つ消えてしまいました。今号ではその惜別の思いを特集しました。
第34回東京三高会は、同窓生が集合して大いに語り合う日です。あなたもぜひご参加ください。

共に歩もう、被災地への道――

十和田の野菜で被災地を元気に 避難者たちと広がる支援の輪

原発事故のあった福島県浪江町から避難して十和田市に暮らす矢澤さんは、震災の傷跡から立ち上がろうとする福島の人々を十和田市の野菜で応援するプロジェクトを呼びかけた。再び巡ってきた三月十一日、十和田市現代美術館で犠牲者への祈りと連帯の輪を広げた。

十和田市に来てたくさんの方から受けた善意におれを言いたいと、同じ避難住民と一緒にイベントを働きかけた矢澤さん（撮影　岩木　登）

ハッピーウィルス拡散中

矢澤アイサ
（福島県浪江町出身）

東日本大震災、そして原発事故。浪江町の我が家は警戒区域に指定された。十和田に来たのは三月二十二日。最初の三ヶ月間はひたすら観光に明け暮れた。中でも頻繁に行ったのが奥入瀬渓流。ぽっかりと穴のあいた心に大自然の力が沁み渡る。ここは何か特別な土地だと直感的に思った。十和田八甲田の噴火物に由来する個性的な土壌から大地のエネルギーをたっぷりと吸収した野菜は本当に美しくて元気。いつしか「農の力で被災地支援」という言葉が浮かんできた。今年三月十一日、十和田市現代美術館で追悼イベントを企画した。こちらに来てから出来た仲間や職場の仲間に助けてもらい、愛とハッピーが満ち溢れるとても素敵なイベントになった。このイベントを通じて近隣の農家さんへ野菜の寄付をお願いしたところ予想以上の野菜が集まった。翌週十七日には福島県二本松市の安達運動場応急仮設住宅で十和田地域の野菜を使って炊出しをした。仮設での暮らしは想像を絶していた。しかし、元気な野菜とせんべい汁をもらって見る見る笑顔が生まれた。野菜を通じてハッピーも付いてくる事を知った。震災から一年。悲しみ怒りが未だに蔓延している被災地福島に十和田の野菜達の力を借りてハッピーウィルスを継続的にばら撒く。それが私の使命だと思い現在奔走中である。

上　会場では、音楽、スライド上映やトークのほか、北園小児童らと福島の被災地へ送るキャンドルやメッセージカードを作るワークショップを開催
下　二本松市でふるまった400杯のせんべい汁

東京三高会 私たちの 2012年3月11日

それぞれがあの日を忘れないという思いを新たにした一日。私たちに出来ること、考えたことをアンケート。その一部。

●ふるさとの自然のありがたさを知った。どんなに遠回りしても、取り戻したい東北の自然。今もふるさとに帰れない苦しさの中にいる人のことを思い続ける。
●信じられない被害の様を子ども達に見せなければと、三陸へ家族で旅行します。
●自然の怖さと、失って初めて知る自然の大切さ。帰る場所って、大切なんだなぁ。
●日本は平和な国ではなかったのですね。日本がもっといい国になるために起こったことだとしたら、いい日本に生まれ変わって子供たちの未来を守りたい。
●お歳暮・お中元、東北の品物から選びました。
●東京に暮らす私たちも、あの震災があったから気付かされたこともあったはず。被災地と東京の距離感が、原発を含む震災事故からの復興の見届けを希薄にさせてはいないか。
●大きな犠牲のもとに私たちは残された者だという自覚を持ち続けているだろうか。「絆」という言葉だけに済ませていないだろうか。

校長メッセージ

ふるさと通信――ありがとう、十和田観光電鉄線

校長　赤坂　寿（ひとし）

『感謝状

青森県立三本木高等学校殿

貴校は、大正十一年九月四日に古間木～三本木間に開業し運行して参りました当社鉄道事業に、長年にわたり多くの生徒にご利用して頂きました。十和田観光電鉄線の運行終了を迎えるにあたり、これまでのご協力に対し、記念品を贈り感謝の意を表します。』

これは、今年三月三十一日に十和田市駅で開催された十和田観光電鉄線運行終了セレモニーにおいて白石社長さんから贈呈された感謝状の全文です。八十九年間、三本木平と全国各地とを鉄路で結び、人や物の交流の源として沿線地域の発展を支えてきた電鉄線が、ついに運行を終了しました。

感謝状の「長年にわたり多くの生徒」の中には、東京三高会の方も大勢いらっしゃるのではないかと思います。在学中に通学の足として、また、卒業後の就職・進学などで上京する際に利用した懐かしく思い出深い鉄道は、今はもうありません。

運行終了が近くなるにつれて、私自身もう一度乗車したいという衝動に駆られ、運行終了前日に十和田市駅六時五分の始発で、三沢駅間を往復してみました。電鉄線は、総距離十四・七㎞、駅数十一、最高時速七十㎞、所要時間片道三十分弱、料金は片道五百七十円。区間によっては鉄路と平行した道路を走っている自動車の方が早いと揶揄されることもあった電鉄線。しかし、この日、朝日を受けながら走る東急七七〇〇系を改良した銀色の電車（実際東横線を走行していた）は、住宅地や畑地を悠然かつ颯爽と走り抜け、私に料金以上の満足感を与えてくれました。

四月一日からは、鉄路に代わり代替バス（路線バス）が運行しています。三高にとって大変有り難かったことは、三沢～十和田市間のバス路線が延伸し、始発（終着）停留所として『三高正門前』が新設されたことです。バス停は校門のすぐ脇にあります。現在、新入生達もこのバスを利用して通学しています。

鉄道からバスへの移行というような、一つの時代が終わり新しい時代が始まる時に、私はちょっとセンチメンタルな気分になります。けれども今回は、運行終了の時期が春であったことが幸いだったようです。というのも、終わりと始まりは、ある意味で全く正反対の感情を私たちに抱かせます。しかし、そのギャップを埋め合わせ和らげてくれたのが、春の業であったと思うからです。春の陽光、暖かな風、芽吹きはじめた草花などが鉄路廃止という衝撃を癒し、私の心を穏やかにしてくれました。

このたび、三高は感謝状をいただきましたが、むしろ、三高から十和田観光電鉄に感謝状を贈るべきだったかも知れないと想っている今日この頃です。

第34回東京三高会総会・懇親会

日　時　平成24年7月7日（土）
午後2:00　受付開始
午後2:30～4:30　総会・懇親会

会　場　日本記者クラブ（宴会場）
千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル9階
東京メトロ・霞ヶ関駅下車徒歩3分
案内状に記載の地図を参照
Tel 03(3503)2721

会　費　男性、女性とも7,000円
（年会費2,000円含む）
新卒生の皆さんは無料招待

事務局　高谷隆二（S40年卒）
連絡先は会報表紙上部に記載

★総会欠席会員の方へのお願い
年会費「2,000円」をお振込みください
（会費とは会報制作・発送・ウェブサイト運営・総会会場費などに使われる費用です）
郵便振込口座記号
0019-5-362825「東京三高会」宛

会長メッセージ

絆の大切さを知った若者が日本の未来を創る

会長　佐々木文雄（S36年卒）

東日本大震災から、もう一年余りが過ぎました。私は改めて人々との絆の大切さを感じた一年でした。被災地の方々の不自由な生活は、少しはいい方向に向かっているのだろうか。将来の夢を描いていた若者たちの心は折れてはいないだろうか。福島原発の放射能問題はこの先どうなるのだろうか…。これからも東北の再生のために結んだ絆を大切にし、途切れさせることなく応援していきましょう。

私は、春になると毎年自社に大学新卒者を仲間に迎えます。その時に彼らに贈るメッセージがあります。「最初に設定する山は大きければ大きい方がいい。一芸に徹し、持ち味を磨くこと。つらいと思うことも耐え抜くこと。先輩方から大いに学び取ること」。いつも同じになってしまいますが、戦後を見事に復興させた日本人の精神の強さを、今こそ思い起こすときだと思っています。つらさや絆の大切さを知った若者が、今よりずっと住みやすい日本を支えていく力になると信じています。

第三十四回「東京三高会」総会・懇親会は七月七日（土）、昨年同様に霞ヶ関「日本記者クラブ」にて開催します。赤坂寿校長をお迎えし、ご抱負をうかがいます。一年ぶりの同窓の皆様との時間が楽しみです。若い人たちも気軽にぜひ多数ご参加ください。

（相模原市在住）

市長メッセージ

活力のある新たな十和田市をめざして

十和田市長　小山田　久（S40年卒）

平素から市政各般にわたり格別のご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

昨年度は、東日本大震災や原発事故の風評被害などにより、基幹産業である観光はもとより地域経済にも大きな影響を受けました。その後、関係者の懸命なご努力により秋頃からは徐々に観光客が戻り始めております。

さて、昨年十一月に、中心市街地活性化の拠点となる複合型商業施設「アートステーショントワダ」が旧十和田松木屋跡地に完成し、飲食店や衣料雑貨など多様なテナントとともにオープンした十和田市観光物産センターでは、地元の特産品のお土産品販売や観光情報発信ができるようになりました。

十和田市現代美術館と街を結ぶ「駅」のような役割を持つ施設。市民と観光客の憩いの場として賑わっていくことを期待

今年三月には、十和田市現代美術館を設計した建築家の西沢立衛さん、十和田市民大学講座での講師をお引き受けいただいたご縁によるファッションデザイナーのコシノジュンコさん・鈴木弘之さんご夫妻、現代美術館のプロデュースを担当された森美術館館長の南條史生さん、現代美術館の企画展でご協力をいただいたご縁による元横綱の貴乃花光司さんの五人を十和田奥入瀬観光大使として新たに委嘱し、当市を全国に広くPRしていただいております。

一方、当市のB級グルメ「十和田バラ焼き」は、昨年出場した「第六回全国B―1グランプリ姫路大会」において、二年連続八位入賞という好成績を収めるなど、全国的にも当市が知られるようになりました。また、一般社団法人東京十和田もみじの会の会員などが運営する十和田の産品を主とした物産ショップ「十和田の食卓」が世田谷区上野毛駅前にオープンし、物産や観光情報発信拠点として関係団体との連携により関東圏での認知度向上に寄与されるなど、市民はもとより県内外在住の皆様や多くの関係者のご協力を得て、各方面から当市の知名度をより一層高める体制が整ってきていると感じております。

地方自治を取り巻く状況が厳しい中ではありますが、今年度は、夏場休業している十和田湖温泉スキー場に草花を植える（仮称）焼山フラワーガーデン事業を実施するほか、自然環境保護などをテーマとしたイベント（十和田湖ecoシーンなど）の開催により、十和田湖・奥入瀬観光の新たな魅力づくりとともに、雇用機会創出や交流人口の増加に向けた取組みを進めてまいります。

今後とも貴重な地域資源を最大限に生かしながら、基幹産業である農業や観光の振興による地域経済の活性化など、様々な施策の展開により魅力あふれる活力のある十和田市の実現を目指してまいりたいと考えておりますので、皆様方のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、東京三高会のますますのご発展と、皆様のご活躍を心からお祈り申し上げます。

「太素の水プロジェクト」未来遺産登録を新たなスタートとして

新渡戸常憲（S61年卒）十和田市立新渡戸記念館　館長
「太素の水」保全と活用連合協議会 会長／音楽学博士・音楽評論家

十和田湖、奥入瀬川を水源に十和田市流域に豊かな水を供給し、太平洋に達する人工河川・稲生川は、150余年をかけて先人たちの努力でつくられ、育まれてきた地域の「宝」です。歴史を見れば私たちの地域では、不毛の台地三本木原に稲生川を引こうと立ち上がった時から、自然を敬う人々の自律的協力による地域づくりが行われてきました。現在も志は受け継がれ、稲生川の自然、文化、歴史を守り、活かす活動をする「稲生川せせらぎ活動委員会」「一本木沢ビオトープ協議会」「Kyosokyodo（共創郷土）」の3つの市民団体と、稲生川土地改良区、北里大学、新渡戸記念館が「稲生川開削と三本木原開拓の志を活かし、共創郷土の伝統を未来に」という意志の下に連携し、多くの地域の方々と活動を継続発展させてきました。「太素の水プロジェクト」と呼ばれるこの活動が、「太素の水」保全と活用連合協議会による官民一体の活動として推進され、昨年末、日本ユネスコ協会連盟の「第3回プロジェクト未来遺産」に登録されました。

「太素」は開拓の祖・新渡戸傳の号で、三高出身の皆さまに馴染み深い太素塚は傳の墓です。この地に住む未来の我々を見守るため、生前に傳が建立した太素塚は傳の〝100年の志〟の証です。その志を受け継ぐ活動ということから「太素の水プロジェクト」という愛称がつきました。東日本大震災から一年が経ち、さまざまな困難を乗り越えながら復興の道を歩む日本において、この活動は、人の在り方、地域の在り方、日本の進むべき方向を示唆するものといっても過言ではないと思います。

未来遺産登録を新たなスタートに、愛すべき故郷をどのような形で100年後に引き継いでいくのかを、地域の方々、そして遠く故郷十和田を想う皆さんと共に考えていきたいと思います。先人たちが人生をかけて育んできた稲生川と、その「志」を、この地に生きる者の誇りとして、努力と愛情で未来へつないで行ければと願っております。

人工河川・稲生川とその恵みに育まれる十和田市の田園風景

★太素の水プロジェクト　https://sites.google.com/site/towadamirai/

ありがとう、私たちの十鉄電車。いつまでも忘れない――

故郷を出るとき戻るとき、私たちの思いを乗せて走ってくれた十鉄電車は、今年三月三十一日、残念ながら創業八十九年をもって、その役割を終えた。十和田市出身の作家・川上健一氏の特別寄稿と、十鉄電車を撮り続けた写真家・小沢純二氏の写真とレポートでたくさんの思い出を共にした十鉄電車に感謝をささげる。

ラストランその日まで「惜別 十鉄電車」のトップマークを付けて運行。地元だけではなく各地から訪れた鉄道ファンが目に焼き付けた

特別寄稿
タイムマシン
川上健一

十和田観光電鉄の一番古い思い出は、母方の祖母と一緒に高清水駅から十和田市駅（当時は駅名が十和田市駅ではなかったような気がするが定かではない。三本木駅だったような気もする）へと向かったことだ。小学一、二年生のことだろう。母の実家の畑が高清水にあり、何かの農作業を手伝うために母が高清水までいくので私もついていった。夕方、祖母と私は一足先に母の実家に帰るために電車に乗ったのだった。

電車は混んでいて立っている人もいっぱいいた。私たちも座席に座れなかったのだが、祖母は畑仕事で疲れていたのだろう、座ろうと私にいって、手拭いか何かを床に敷いてサッサと腰を下ろしてしまった。そんなことをする人は誰もいなかったので、乗客たちに好奇の目でじろじろ見られてしまった。

床に座るということが、子供の私はとてもはずかしいことのような気がして躊躇っていると、祖母は私の腕をグイと引っ張って強引に座らせてしまった。ものすごくはずかしくて顔を上げられず、油がしみ込んでいるような焦げ茶色の床をじっと見続けていた。

三沢に親戚があるので、その前にも何度か電車に乗っているはずなのだが、はずかしかった思いが強烈だったのでその時の記憶が一番古い思い出として残っている。

祖母のことはほとんど覚えていないので、十和田観光電鉄でのあの思い出がなければ祖母を思い出すことはなかっただろう。

私は十和田工業高校を卒業して東京に出たのだが、帰郷する時に十和田観光電鉄に乗るのが好きだった。

八甲田山の低い山並みが見えてくると、高校生まですごしたあれこれの情景がまざまざと蘇り、自動的にスイッチが切り替わって十和田の人間になった。もちろん言葉も完璧な十和田言葉に入れ替わる。普段は忘れている、子供の私、中学生の私、高校生の私に、十和田市へと向かう十和田観光電鉄の車中で出会えることができた。

十和田観光電鉄は、私の大好きなタイムマシンだった。

［編集部註］川上健一氏は一九四九年十和田市生まれ、十和田工業高校卒業。一九七七年『跳べ、ジョー！B・Bの魂が見てるぞ』で小説現代新人賞。二〇〇一年には、青春自伝小説『翼はいつまでも』で坪田譲二文学賞を受賞、爽快な青春小説を著し活躍中。『四月になれば彼女は』、『あのフェアウエイへ』なども、十和田市で暮らした川上さんのノスタルジー溢れる必読の書。

十和田観光電鉄の歩み

一九二二年（大正11年）九月、東北本線特急駅古間木駅と寒村だった三本木を結ぶ十和田鉄道が開通した。三本木原を一直線に蒸気で走る列車に、人々はさらなる地元の発展と夢を重ねた。

❶周辺に原野が広がる開業時の古間木駅。❷1940年頃、三本木駅前は市街地に向かう人力車やタクシー、乗合い自動車で賑わっていた。

❸1950～1960年代に導入された〝東北随一のデラックス電車〟は当時の話題に。❹利用客で混雑する2代目駅舎の中1960年代か。❺1955年に新築された2代目の駅舎。❻1968年十勝沖地震で駅舎はわずか10年余で灰燼に帰した。その後「十和田市駅」となった3代目の駅舎が17年間十和田市の玄関口となった。

資料写真 ❶❷❸❹十和田観光電鉄株式会社、❺撮影:荻原二郎（RM LIBRARY51『十和田観光電鉄の80年』／ネコ・パブリッシング刊より転載）❻デーリー東北新聞社

この線路の向うに希望や夢を見た、あの若かった日々

3月31日、ラストランの日を迎えた十和田市駅

遅い春を待って咲く満開の桜を見ながら乗った贅沢

工業高校前駅。高校生活を支えてくれた十鉄に感謝

最終日の朝、薄い霧が立ち込める中ゆっくりと進む電車

三沢の駅舎は当時のまま。いつも「帰ってきた」と実感した

三本木原台地を走り抜けた十鉄へのレクイエム
十和田観光電鉄写真展を終えて

小沢純二
（S44年卒）
写真家

地域の文化財を発掘・発信する活動を共にしていた縁で、昨年十月、三沢市先人記念館において開催された企画展「三沢の鉄道展」で電鉄線の撮影の依頼を受けました。それが今回の写真展のきっかけとなりました。見慣れたはずの沿線でしたが、撮影に行くたびにいつも新しい発見があり、89年の歴史を濃厚に感じることができました。特に三沢駅舎と七百変電所は建設当時のままの状態で、あらためて感動を覚えました。しかし、撮影開始から一月後、突然の廃線発表、しかも半年後に……まさに晴天の霹靂でした。その後は、とにかく廃線前に記録しておかなければとの思いで撮影に取り組みました。

一九二二年（大正11年）に十鉄が開通するまで、三沢まで人々は15㎞の道のりを歩いていくか、馬車または人力車で行くしか方法はありませんでした。荷物も同様です。雨が降れば道はひどくぬかるみ、馬車が横転することも珍しくなかったそうです。鉄道は三本木町の悲願だったのです。そんな時代背景の中、福島の事業家が三本木町の名士たちと共に鉄道会社を興しました。開通後まもなく、焼山までの延線も計画され、戦時中は海軍省航空廠三沢分工場で働く人々のために増便、駅では出征兵士を見送る人々の姿が見られたそうです。戦後はフジ製糖の社員を乗せ、小松ヶ丘駅設置の計画もありました。いずれの計画も頓挫しましたが、十鉄の歴史はまさに十和田、六戸、三沢の歴史そのものであり、沿線の人々の喜びと悲しみを運び続けたと言ってもいいでしょう。

そんなことを感じとってもらいたいと思っていましたが、写真展に来場された方々は皆さん熱い思いを語ってくれました。「旧三農校舎に通い、野球部の練習で最終電車に乗り遅れ、足駄を脱いで線路を歩いて帰った」「青森までの修学旅行の際、古牧温泉の坂を電車が登れなくなり、みんなで降りて押した」等々、話は尽きませんでした。十鉄はみんなの身体に沁みこんでいました。

私にとっての十鉄は、青春の改札口でした。三高を卒業して東京に出る時、期待と不安を胸に改札を抜けたことを覚えています。帰省の際、満員で立ち続けた夜行列車、疲れ果てた私を最初に暖かく迎えてくれたのも十鉄の電車でした。そんなことを思い出しながら、いま、五月末に刊行する写真集の編集作業を進めています。私の写真は、拙ブログ「青森里山案内人」「十和田観光電鉄ラストラン」、Facebookでご覧いただくことができます。東京三高会の皆様と故郷・十和田市への思いをいつまでも共有できますことを祈念しています。

（十和田市在住）

落ちこぼれから今の仕事へ

松田瑞子（H5年卒）
塾講師・家庭教師

三高時代といえば、入学してすぐに落ちこぼれたことをまず思い出します。私はもともと物理分野やもの作りに興味があり、理系の大学に進みたいと三高の理数科に入学しました。

ところが、学校が始まってみると数学の授業がさっぱりわからないのです。どのくらいかというと、先生が日本語を話している、というくらいしかわからないのです。それまで数学は得意だったので焦りました。初めてのテストで先生が「五十点以下は相当反省するように」とおっしゃって、その五十点以下だったのでかなりショックを受けていると、さらにクラスメイトの「え、そんな人いるの」という声まで追い打ちをかけてきます。小テストのたびに追試、追々試……。初めて「わからないってこういうことか」と実感しました。この時は本当に焦り、かなり勉強して、なんとか一学期末には学年二位までこぎつけました。分からないというのがどういう感覚か、どんなやり方をすれば効果が出るのか、わかるようになるというのはどういう感覚か、ということを身をもって経験しました。

このときのことが、塾講師や家庭教師として高校生を中心に数学を教える今の仕事に、本当に役立っています。表情のない暗い顔で入塾してきた子が、だんだんと結果を出して笑顔を見せるようになっていくのは、本当に嬉しいものです。大学に合格し、それぞれの道へ歩み出したという知らせをもらうと、私までワクワクしてきます。数学の授業という仕事を通じて、できるだけたくさんの子供たちに、やり方次第でできるようになり、トライしてみる価値はあるということを、体験してもらいたいと思っています。

せっかくインターネットの発達した時代です。首都圏での直接の指導だけでなく、ブログやサイトから、地域を問わない応援を続けていきたいと考えています。

（神奈川県川崎市在住）

東北新幹線キャンペーンキャラ「いくべぇ」と一緒

松田さんのブログ「受験数学のツボ」をご覧ください。

出会いと絆を大切に

小野　全（S61年卒）
生活用品メーカー勤務

三高入学時、真っ先に思ったのが「野球をしよう！（もちろん勉強も）」でした。当時三高は県内で優勝候補筆頭の強豪校で、怪我のため中学で運動ができなかった私は、三高で甲子園を目指してみたいと思ったのです。

実際は学業と部活を両立できたとは言えませんでしたが、多くのすばらしい恩師や友人、先輩、後輩に巡り会えた事、三年間野球を続けられた事は今も大きな財産であり誇りです。

進学は仙台の東北工業大学工業デザイン学科を選びました。中学時代写真部で、写真を通じて多くの芸術に触れた事が影響したのだと思います。自動車のデザイナーを目指して勉学に励み、富士重工業㈱に入社することが出来ました。実は「特技は野球でピッチャーできます」と面接で言った事が採用の決め手だったそうで、すぐにデザイン部のエース（草野球チームのですが）に。三高野球部が未来へのドアを開けてくれたようなものです。

三年間勤めた後、宮城県のアイリスオーヤマ㈱にJターンし、以後十八年間商品開発に携わっています。昨年の大震災では、多くの友人・知人に励ましと心遣いを頂き、月並みですが「絆」の有り難さ、大切さを痛感しました。

この震災後「フェイスブック」（以下FB）を活用して、疎遠になっていた故郷の友人や、三高OBの方々とのネットワークを広げました。FBを通じたOBの方々との交流には、世代を超えて通ずる三高や十和田への深い愛情を感じます。いつか皆さんに実際にお会いしてみたいものです。

多くの三高OBの方々と、「三木野ヶ原」やFBを通じて絆を深める事ができれば、何か素晴らしい事や新しい事ができるのではないかとワクワクします。

もちろん甲子園のスタンドで皆に会えたら最高ですね。私の夢です。

（宮城県名取市在住）

家族と義経ゆかりの仙人堂へ旅行

一会員からのメッセージ

佐藤　中（S32年卒）
東京三高会第2代会長・医師

1987（昭和62）年から2期4年間、会長をつとめられた佐藤先輩からの久しぶりのご寄稿です。
1996年に当会の愛唱歌「三高会の歌」を作詩なさるなど若者に向ける言葉の熱さは、いつまでも変わりません。

いつの世も、平穏であったことはありません。何らかの困難が持ち上がり、先代たちは、その都度叡智を振り絞り、乗り越えてきました。切羽詰った中から湧き出してきた、創意工夫の歩みとも言えます。

人生は青春ばかりではなく、老いもあり死も訪れます。自然のものとして受け止めなければなりません。人間は、霊長類の長とも言われますが、一介の動物でもあります。素朴な心と生きる意欲を持って、歩み続けることが大切でしょう。自然を大切にし、共存して生きましょう。母校の中・高校で活動しているブナの植林も、とても良いことと賞賛いたします。

母校の三高は、我々がそこで過ごした時代を遥かに超えた形で展開しています。十和田市出身の素直な心と特有な粘りとで、新卒の方々のご参入を頂きながら、同窓生は手を取り合って、東京三高会を盛り上げていって頂きたいと思います。繁栄ではなく、着実な前進こそが大事だと思います。

（神奈川県海老名市在住）

佐藤元会長、23歳
詩を書いていたころ

〈出版のお知らせ〉
1995年刊行の同名の本を、このたび文芸社から復刻することになり、全国版で7月上旬発売されます。第1章〈青春詩集45編〉、第2章〈旅の失敗話24話〉、第3章〈霊験記10話〉に、新たに第4章〈少年の日〉、第5章〈還暦〉の2章が加わりました。
A5判250頁　ハードカバー
定価 1,700円＋税　文芸社刊

「青春の旅路に」

1　君は去りて　どこへゆくのか
　青春の　さすらいの果て
　苦しみを　のり越えて
　光を求めて　進むのか

2　街は　まだ　眠っている
　行きたければ　行くがいい
　人々の　目のさまさないうちに
　憧れの山を　目指して　発つがいい

3　苦しみの中に　君は何かをつかむだろう
　悲しみの中に　君は何かが判るだろう
　そして　喜びと空しさの中に
　君は　青春をみるだろう

4　青春は　通り風のように　過ぎ去る
　しかし　懐かしんでいては　いけない
　青春とは　人生に力を与える　種なのだから
　収穫に向って　わき目もふらずに　進むのだ

5　君は　死ぬときに　ようやく
　青春をふり返っても　よいだろう
　ああ　人生の全ては　青春だったのだと
　これが　私の　人生だったのだと

「消し忘れた青春日記」佐藤　中著　1995年版より

「三高会の歌」は、佐藤　中作詞・長谷川芳美先生作曲で誕生。佐藤元会長製作の、1996年のカセット版、2007年のCD版は当会会員の宝物。

三高卒業おめでとう――H24年3月卒のみなさん

小沼智子さん

私は早稲田大学に進学しました。今の私があるのは、先生方や友人たちの支えがあったからこそだと思っています。三高時代、私はバドミントン部に所属していました。毎日のきつい練習に耐えられたのは、部活仲間のおかげです。また、私は理数科だったので3年間クラス替えがなく、すばらしい仲間とずっと過ごせたことを誇りに思います。高校で出会った友人は一生の付き合いになると思います。

大学生活は、右も左もわからない状態で不安もたくさんありますが、それ以上に期待で胸がいっぱいなことも確かです。早稲田大学で人種や国籍も違う様々な人との出会いを通じて自分の世界観を広げていきたいです。また、大学生活での様々な困難を、三高で培った精神力で乗り越え、立派な社会人として生きていけるような力を身につけます。

太田　洸くん

私は4月から学習院大学に進学しました。私が辛い大学受験を無事に終えることができたのは、私を支えてくれた三高の多くの先生方や友人、部活の先輩後輩のおかげだと思っています。三高という恵まれた環境が無ければ今の自分はありません。そんな、周りの助けで高校生活を過ごした自分が一人暮らしをしながら大学へ通うことになり、不安が今、頭の大部分を占めています。

ですが、大学では、ずっと学びたかった法学・政治学を学ぶ事ができるので不安の中にも期待を抱いています。大学では高校では出来なかった様々なことに挑戦して成長していきたいです。将来の夢などはまだ決まっていませんが、三高で学んだことを上手く活かして法学・政治学に携わりながら、人の役に立つような人間になりたいと思っています。

畑山寛二くん

私は、国立看護大学校に進学しました。三高への入学から始まり、分離選択、センター試験など分岐点がいくつもありました。この3年間を充実して過ごせたのはよい友人や仲間を始め、熱心な指導をしてくださった先生方などのおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいです。

最前列で横になっている右側が僕

私はこれから人と関わることが主となる看護学を学んでいくにあたって先への不安も多くありますが、自分の夢の実現、またサークル活動やアルバイトなど新たなことへの挑戦に期待も大きく膨らんでいます。これからは親元を離れての生活が始まりますがこれまで支えてくれた両親への感謝の気持ちを忘れずに、少しでも自立し成長できるよう、学業だけでなく多方面に努力していきたいです。

第33回「東京三高会総会・懇親会」開催

平成二十三年七月二日（土）、第三三回総会・懇親会が、日本プレスセンタービル九階宴会場に八〇名の参加のもと行われました。

四月より赴任された赤坂寿新校長にご挨拶と母校の現況報告、今泉湧水本部同窓会副会長にご挨拶をいただきました。東日本大震災による被害者と物故会員への黙祷からスタートした懇親会では、当会会員で震災直後から積極的な支援活動を行っている写真家・岩木登氏（S57年卒）の現地報告に皆聞き入りました。途中テノール歌手滝沢健作氏の被災地の霊を慰める歌声が会場に響きました。

今回は、娘さん夫婦とご一緒のS24年卒の大先輩や、開設された三高Webを見て参加してきた後輩など、新しい参加者も迎えました。バイキング料理を楽しみながら懇親会は進み、東北支援企画の十和田市物産くじ引き会で盛り上がりました。近くの居酒屋での二次会に今年も多数参加、再会を約して散会しました。

三高の、今

工藤亨一 教諭（S50年卒）

今号から現役三高生の活動や声をお届けします

震災支援、私たちのかたち

丸 保奈美（三年・女子バレーボール部）

「僕のした単純作業が
この世界を回り回って
まだ出会ったこともない人の
笑い声を作ってゆく」

これは私が好きなミスターチルドレンの曲『彩り』の一節です。私たち部員十二人も、被災地の人たちが元の生活を送れるよう少しでも役に立ちたいと、昨年七月二十日、岩手県野田村で泥・土砂撤去のボランティアに参加しました。

バスで到着した町は、ほとんどが破壊し尽くされ、まるで戦後の焼け野原を想像させるような光景で、部員たちは言葉を失いました。所々に見える民家にも二階まで津波のラインが残り、改めて津波の恐ろしさとその規模の大きさを実感しました。

今までの生活が土砂で埋め尽くされていた町。土砂撤去に頑張った仲間とその時間をいつまでも忘れない。

当日は、茨城県や千葉県の一般ボランティアの方々と一緒に、スコップやねこ車を使って民家に堆積した泥や土砂の撤去作業。最初は、やってもやっても進んでいないような気持ちになりましたが、少しずつ協力して続けているうちに、大きな力となり、午前十時から午後四時までの作業で、最終的には土嚢三〇〇袋分になりました。しかし、専門の作業員からの指導や重機などがあればもっとスピーディーな復興がなしえるのにと、国や自治体の対策の遅れも感じました。

テレビや新聞で被災地を目にする機会はありましたが、実際に現地に行ってみなければわからないことがたくさんあり、いまだに多くの人たちが不便を強いられていることも知りました。被災地のことを今後も忘れず、自分にできることを行動に移していきたいと考えています。

［トピックス］

その1　「三本木夢と生命の森」プロジェクト報告　今年度はクマタカの巣立ちを待って十月三・四・五日の三日間でブナ苗三千本の植樹をしました。皆様のご支援のもと植樹三年目、平成二十三年度をもって、ブナ苗およそ一万本の植樹活動を完了することができました。十月三日には、関係者で植樹完了セレモニーと祝賀会を開催し、今後百年の森作りへの決意を確認し合いました。

その2　部活動報告　平成二十三年度も、大変優秀な成績を収めました。本校のホームページに詳しく報告していますので、そちらをぜひご覧ください。

その3　「平成二十四年度　本校同窓会総会・親睦会」のお知らせ　十和田市在住の多くの恩師の方々をご招待しています。帰郷の折にはぜひご出席ください。

日時／八月四日（土）午後五時～七時　場所／富士屋グランドホール会費／四〇〇〇円　連絡先／三高同窓会事務局（〇一七六―二三―四一八一）

●これまで長い間、東京三高会にご協力・ご支援くださり本欄を担当した工藤亨一先生は、4月に八戸東高校に転勤なさいました。木村智志（さとし）先生（S52年卒）が後任として引き継がれました。

東京三高会
オフィシャルサイト
近日リニューアル！
世代を超えて
http://tokyo-sanko.net/
ブログも開設しました。ぜひごらん下さい。

■東京三高会役員

（任期：平成23年7月～平成25年7月総会まで）

		卒年
名誉会長	下佐　剛	(S28)
顧　問	佐藤　中	(S32)
	野呂　義春	(S32)
相談役	阿部　光成	(S28)
	今　久子	(S28)
	野口　宥子	(S30)
	前川　十志男	(S31)
	村中　弘	(S32)
	下山　雅章	(S33)
	漆畑　満	(S34)
	堰野端富志男	(S38)
会　長	佐々木　文雄	(S36)
副会長	北川　和子	(S30)
(事務局長)	高谷　隆二	(S40)
	佐々木　賢明	(S40)
	冨田　俊一	(S43)
(広報)	坂田　俊英	(S55)
理　事	藤本　モミ	(S29)
	五十嵐　明子	(S31)
	高松　重光	(S36)
(会計)	高坂　忠	(S37)
	田制　則子	(S37)
(会計)	鈴木　朋子	(S38)
	馬場　洋子	(S38)
	三浦　景子	(S38)
(広報)	佐藤　文哉	(S41)
(広報)	瀬戸口　玲子	(S41)
	望月　福子	(S42)
	岸　綾子	(S46)
	畠　雅仁	(S47)
(会計)	高坂　忠	(S37)
	鈴木　朋子	(S38)
監　事	中野　欣一	(S41)
	野坂　和夫	(H5)

寄付募集へのご協力感謝します

会長　佐々木文雄

本会ホームページ開設にあたりご寄付いただいた方のお名前を記し、感謝の意を表します

（敬称略　卒業年・五十音順）

内田　敬子（S21卒）
今　久子（S28卒）
北川　和子（S30卒）
五十嵐　明子（S31卒）
前川　十志男（S31卒）
佐藤　中（S32卒）
野呂　義春（S32卒）
村中　弘（S32卒）
漆畑　満（S34卒）
佐々木　文雄（S36卒）
高松　重光（S36卒）
田制　則子（S37卒）
鈴木　朋子（S38卒）
馬場　洋子（S38卒）
佐々木　賢明（S40卒）
高谷　隆二（S40卒）
佐藤　文哉（S41卒）
瀬戸口　玲子（S41卒）
望月　福子（S42卒）
沼宮内　薫（S45卒）
岸　綾子（S46卒）
岩木　登（S47卒）
坂田　俊英（S55卒）